二〇〇九年一二月二七日（忘年会 参加者九名）

至福とは無我の境なる日向ぼこ　宏　虎
一湾に漁火一つ冴えにけり　〃
地図ひろげ旅行プランや春隣　〃
一年の来し方想ふ柚湯かな　わかば
人波にひびくラッパや社会鍋　〃
山茶花の散り敷く門に踏み惑ふ　〃
残照に生気かがよふ大枯木　明日香
大空へオブジェめきたる枯木立　〃
下草に珠の光や霜の朝　ひかり
蒼天を透かして残る紅葉かな　〃
天辺に終のひと葉や冬木立　きづな
彫像のごと白鷺の身じろがず　〃
音痴なるトランペットや社会鍋　かれん
悴める子の手を双手つつみかな　ぽんこ
社会鍋托鉢僧と並びをり　はく子
数へ日の心斎橋をたもとほり　〃
青畝忌の今日は寒さもひと休み　〃

吟行句会みのる選

二〇〇九年一二月二七日（忘年会 参加者九名）